名古屋の山車祭

名古屋の山車祭りを伝える、東区の山車

東区には、江戸期に名古屋の三大祭りで曳かれた山車が現存しています。
また、貴重な囃子をはじめ、町内ごとに伝わる数々のしきたりも伝承。
名古屋の山車祭りを今に伝える第一人者として、
祭りに参加している皆も誇りに思い、取り組んでいます。

徳川家康が開府して以来、
400年以上の歴史をもつ名古屋。
この城下町の一角に、
名古屋市東区筒井町・出来町はあります。
筒井町は武士の侍屋敷と商人の町、
出来町は職人の町として、栄えました。
隣り合うこの二つの地区では、
町内の無病息災を願う天王祭が江戸期から行われ、
今も、からくり人形をのせた山車が町内を練り歩きます。

宵の山車揃え 建中寺(2018年)

徳川園山車揃え

【山車(だし)の語源】

神を招き寄せるため外に出す「出し物」であるからとする説や、屋台の鉾につけた竹籠の編み残し部分を垂れ下げて出してあり、その部分を「だし」と言ったことに由来するという説がある。「だし」を「山車」と書くのは当て字で、祭礼のときに、神の降りる「依り代」として小さな山を作っていたものが発展し、移動可能な車となったことから、「山車」の字が当てられたと考えられている。

【おまつり】

名古屋地方でお祭りというのは、各神社で神事が行われることに加えて、東照宮祭、若宮祭などに曳き渡す山車そのものをさして「お祭り」という。「お祭りが飾ってある」「おまつりを曳いてきた」など。

山車 ってなに?

山車(だし)とは、お祭りのときの「出し物」として曳く、種々の装飾を施した屋台のこと。関東では「山車」、関西では「壇尻・車楽(だんじり)」や「山(やま)」「鉾(ほこ)・山笠」、屋台など様々な形態の山車があります。

東海地方は山車の宝庫として知られますが、なかでも高山祭や犬山祭で有名なからくり人形をのせた山車は、愛知県に集中しており、多くの地域の季節の祭りでは、華やかな山車の数々を見ることができます。

◀ 高さ20メートルを越える巨大な「田中山」(熱田大山祭)
4段に組まれた櫓の上に松の木を立て、からくり人形が置かれていた。

▼ 戦前の東照宮祭での京町小鍛冶車(本町通)

からくり山車のルーツ 名古屋

多くの山車祭りがこの地に生まれた背景として、名古屋三大祭り(東照宮祭、若宮祭、三之丸天王祭)において、江戸期にからくり山車が盛大に曳かれるようになったことがあげられます。なかでも、祭り(山車)好きの10代藩主斉朝公の時代に最盛期を迎えた東照宮祭は、それぞれ趣向をこらした9輌の山車に35町の警固(仮装行列)を加えて、総勢数千人が参加する一大パレード。昔は「名古屋祭」と言えばこの東照宮祭を指していました。

巧みに仕組まれたからくり人形が山車上で舞い、繊細豪華な山車を囃子に合わせて曳きまわすこれらの祭りは東海地方の祭礼に大きな影響を与え、尾張各地でこのような山車祭りが行われるようになったといわれています。

名古屋の山車祭り文化を継承する 東区の山車

戦国時代から続いていた熱田大山祭。そして、これほど盛大に行われていた名古屋三大祭りのうち、原型をとどめているものはありません。電線の普及など、山車が曳けなくなってしまったのです。

東区でも中之切、東之切の貴重な山車が昭和20年の名古屋空襲で焼失。さらに昭和34年の伊勢湾台風でも大きな打撃をうけましたが、町内の人たちの熱意により古車を購入、あるいは自力で再建するなどして、自町の天王祭を守ってきました。

現在、東照宮祭の祭礼車が唯一残る筒井町の湯取車をはじめ、若宮祭祭礼車の鹿子神車・河水車・三之丸天王祭見舞車の神皇車と、名古屋の三大祭りで曳かれた山車を東区で見ることができます。また、町ごとに伝わる囃子、櫂方の技術、からくり人形操作などの祭り文化を守り、次代に伝えていこうという心意気はどこにも負けないと自負しています。

戦後、復興した古出来町の山車1号、馬車の台座に柱を取り付け、元禄雨障子を屋根にした。

【庭氏の祭り「天王祭」】

天王祭とは、人々が疫病から逃れる為に、津島神社の祭神・牛頭天王をお祀りする神事。名古屋では三之丸天王祭とは別に町々で江戸中期から、祠や屋根神様に津島神社の御札を祀るようになり、斉朝公の時代、山車祭りに変化していった町もある。

筒井町、古出来町では、津島神社(代参。山車の四本柱に御札が祀られる。(出来町の西之切と中之切では、代参および四本柱に祀ることは行われていない。)

天王祭の間、お祭り町内を曳行する山車は御祝儀をいただく家々で、無病息災を祈り、人形からくり、人形囃子、力持ちなどを披露する。

祭り狂いの伊勢門水の祭り談

「一体全体この山車と云う物はすべて活動するものに出来てをつて、それが四拍子の音楽に乗り地となり、十丈の青綱にとまつた大勢の曳子が揖方の木遣節に意気を合せ、エンヤーエンヤーと曳出す勢ひに目方の千貫目もあらう金飾燦爛とした大きな山がぎリ、ぎリと揺き出す、この光景が最も愉快な面白いものでさてもさても形容詞の及ばぬ妙味が備つてをる、それをただ揺付たままでは活人形や雛棚を見ると同様、何んの趣味も価値もあるはずはない、動かぬ山なら出さぬがましだぞ」

(『名古屋祭』伊勢門水著・初版明治43年発行より)

■協　　力：筒井町神皇車保存会／湯取車保存会
西之切奉賛会／中之切奉賛会／古出来町奉賛会
徳川園事務所
■写真協力：名古屋市立工芸高等学校 グラフィックアーツ科
野畑政行 他
■参考資料：「東区の山車」(名古屋市東区役所)
「名古屋市山車調査報告書」(名古屋市教育委員会)
「名古屋祭」伊勢門水
「郷土の山車写真集」山田鉦七
「尾張の山車まつり」https://dashi-matsuri.com/
■発　　行：NPO法人「東区山車まつり振興会」
https://higashiku-dashi.or.jp/
名古屋市東区役所
■発行年月：令和3年3月

交通アクセス
- 筒井町天王祭へは…地下鉄桜通線「車道」下車
- 出来町天王祭へは…基幹バス2号系統「徳川園新出来」または「古出来町」下車
- 徳川園へは…基幹バス2号系統「徳川園新出来」、なごや観光ルートバス・メーグル「徳川園徳川美術館蓬左文庫」下車
- 名古屋市役所へは…地下鉄名城線「市役所」下車
- 建中寺へは…地下鉄桜通線「車道」下車

問い合わせ先:東区役所区政部地域力推進室
TEL 052-934-1123

筒井町 神皇車(じんこうしゃ)

巫女人形
(龍神に変身したところ)

維持管理 筒井町神皇車保存会

1818(文政元)年頃、旧広井村新屋敷(現中村区名駅4)で三之丸天王社の見舞車として造られたものを、1887(明治20)年、当時の筒井町が譲り受けた。屋根・高欄部分が朱色に塗られているのは、名古屋では珍しい。舞を踊った巫女が鬼の面をかぶり、龍神に早変わりするからくりは、神功皇后三韓征伐の折、龍神が現れ波をしずめた故事による。

戦災、天災からの復興

「戦後しばらくして、戦前の祭礼を覚えていた町内の人たちから話が出て、まず笛の稽古を始めました。毎晩遅くまで吹き、ようやく音が出て、一曲が吹けるようになり、昭和23年6月からまた毎年曳くようになりました。」

神皇車(じんこうしゃ):戦後揃いの浴衣を新調した、天王祭宵祭(昭和26年5月31日撮影)

筒井町 湯取車(ゆとりぐるま)

笛吹き人形(鼻こすり)

維持管理 湯取車保存会

1658(万治元)年、東照宮祭礼車として旧桑名町(現中区丸の内2)で造られ、1831(天保2)年、当時の情妙寺前に譲られた。現存する名古屋の山車では、最も古い。安倍晴明の前で神子が両手に持つ笹束で湯をふりかける仕草をし、湯の花と呼ばれる紙吹雪が吹き出すからくりは、お湯で厄災を清める「湯取り神事」を表す。

戦災、天災からの復興

「昭和22年から山車の曳行が再開されたものの、伊勢湾台風で中断。昭和50年に筒井町天王祭での曳行が16年ぶりに復活しました。提灯の付け方一つから勉強しなければならず、復活にはかなりの苦労がありました。」

湯取車(ゆとりぐるま):戦後初めての筒井町天王祭
(昭和22年6月1日撮影)

出来町 鹿子神車(かしかじんしゃ)

大将人形

維持管理 西之切奉賛会

若宮八幡社祭礼車として曳かれていた山車を、1810(文化7)年に西之切が旧住吉町(現中区栄3)から譲り受けたとされている。唐子人形(小唐子)が逆立ちして小太鼓を打ち鳴らし、もう一体の唐子人形(中唐子)が団扇太鼓を乱打しながら左右に飛び回るのを見て、軍配を高々と上げる大将の姿が勇壮なからくり。

戦災、天災からの復興

「空襲で『西之切永代帳』は焼失したものの、山車蔵は奇跡的に焼け残りました。戦後まもない昭和21年から天王祭を再開。出来町で唯一焼け残った山車が荒廃した町中を曳行され、町内復興の源となりました。」

西之切:戦前のメインストリート「二軒家筋(出来町通りの一本南)」を行く鹿子神車(かしかじんしゃ)

出来町 河水車(かすいしゃ)

獅子の唐子人形

維持管理 中之切奉賛会

尾張10代藩主斉朝公より拝領したといわれる「石橋車」を、惜しくも昭和20年の空襲で失った。現在の山車は、昭和23年に旧住吉町(現中区栄3)から若宮祭の祭礼車「河水車」を譲り受けたもの。昭和25年、この町に二百年来伝わってきた能楽「石橋」に由来する、勇壮で激しい動きの獅子舞のからくりができるように、人形を替えている。

戦災、天災からの復興

「山車はおろか、幕、人形、衣装、過去帳など全てを戦災で焼失しました。昭和23年2月に河水車を住吉町から譲り受け、とにかく山車を曳きたいという気持ちから、婦人の丸帯をつないで幕を作り、戦後初の天王祭の曳き出しに間に合わせました。」

中之切:江戸期から中之切で曳かれてきた「石橋車(しゃっきょうしゃ)」(戦災で焼失)

出来町 王義之車(おうぎししゃ)

麾振り人形

維持管理 古出来町奉賛会

寛保年間(1741～44)に他所で造られたものを、1805(文化2)年、東之切が購入。戦災で焼失したが、昭和26年から5年がかりで再建した。空木建、人形およびその衣装にいたるまで、町の人たちの手による。獅子頭をかぶった子人形が親人形の肩に手を掛け、逆立ちをして獅子を舞うという、からくりの高度な技が見もの。

戦災、天災からの復興

「戦災で山車を焼失したため、昭和23年から3年くらい、暫定的な山車を曳いていました。新しい山車の製作は昭和26年から始まり、気の遠くなるような年代層、人員数、試行錯誤を経て現在の姿となっています。」

東之切:戦前の「王義之車(おうぎししゃ)」。巨大な山車であったと伝えられる。(戦災で焼失)